

プログラム・ノート

奥田佳道

2027年のベートーヴェン没後200年に向けた「7年プロジェクト」の第2回。葵トリオは、このジャンルの古典、秘曲、近現代の逸品を嬉々として紡ぐ。時代も次代も切り拓いたベートーヴェンのピアノ三重奏曲の創作過程に想いを寄せ、さらに「ゲスト・コンポーザー」にも腕を揮う。昨年は没後100年のサン＝サーンス、今年は生誕200年のフランクだ。精妙に移ろいゆく細川俊夫の調べとも相愛で、ドイツでは『メモリー—ゆん い さん尹伊桑の追憶に』を奏でた。実は細川に新作を委嘱したという(2027年初演予定)。旅は始まったばかりである。

ベートーヴェン：ピアノ三重奏曲第2番 ト長調 作品1-2

アダージョ、27小節の序奏をもつ。後のピアノ・ソナタや弦楽四重奏曲、交響曲を予告するような筆致だ。

作品1のピアノ三重奏曲3曲はルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)が20代前半だった1793年から95年にかけて書かれた。気鋭の作曲家による話題作ゆえ、音楽を愛してやまないウィーンの有力貴族が、あたかも競うかの如く先行予約受付で楽譜を購入した。

曲は、私的初演に手を差し伸べ、初版の経費も負担したりヒノフスキー侯爵に献呈されている。なおその私的初演をヨーゼフ・ハイドン(1732～1809)が聴いている。

鍵盤のヴィルトゥオーゾとしてウィーンに名乗りを上げたベートーヴェンは、古典の様式美を遵守した上で構えの大きなトリオを創り、イタリア趣味色が強かったウィーン音楽界に新風を吹かせた。すべての楽章が長調で構成されるなど、セオリー外の調構造(たとえば第2楽章が曲の主調ト長調から遠隔のホ長調)も魅力となる本作は、教則本でおなじみのヨハン・バプティスト・クラマー(1771～1858)やハイドンゆかりのヨハン・ペーター・ザロモン(1745～1815)により、早くからロンドンにも紹介された。

第1楽章 アダージョ～アレグロ・ヴィヴァーチェ

第2楽章 ラルゴ・コン・エスプレッジオーネ

第3楽章 スケルツォ：アレグロ

第4楽章 フィナーレ：プレスト

細川俊夫：トリオ

彼方から

pppp

でかすかに響くA(ラ)の音。万物創造の瞬間に立ち会うかのような冒頭から細川俊夫(1955～)の美学が全開だ。

細川によれば、曲は現世と来世を繋ぐシャーマン(預言者)の世界を映し出す。ヴァ

イオリンは女性、チェロは男性のシャーマンで、ピアノは宇宙と自然を描く。

微分音も舞うこの幽玄な三重奏は、しかし私たちが漠然と思い描く以上に表出性が強い。トレモロやピッツィカートの効果、高音域で浮遊する音たちに驚く。

曲は、2013年にスペインの金融グループBBVA財団(科学者や芸術家への顕彰を行っている財団)の委嘱で書かれ、同年9月にフランスのストラスブールでトリオ・アルボスによって初演、献呈された。2017年に細川自身により改訂されている。演奏時間は約11分。

フランク：協奏的三重奏曲第1番 嬰へ短調 作品1-1

冒頭のピアノにご注目を。オルガンの足鍵盤に通じるかのような低音のくっきりとした響き。執拗に繰り返される動機。耳に残るこの調べは、姿や形を変えながら曲全体を彩る。

ピアニスト、作曲家として歩み出したセザール・フランク(1822～90)若き日の肖像を聴く。3つの楽器の有機的な呼応と構築が身上で、動機を循環させる書法も際立つ。いっぽう、美への憧憬に満ちた旋律も舞う。

ベルギーの古都リエージュに生れ、パリで活躍したフランクと言えば、声高に申すまでもなく、ウジェーヌ・イザイ(1858～1931)の結婚祝いに贈られたヴァイオリン・ソナタイ長調と重厚な味わいと気高さをあわせつつ交響曲 二短調が人気だ。次いでピアノのための『前奏曲、コラルとフーガ』、ピアノ五重奏曲、ごく稀にピアノとオーケストラのための『交響的変奏曲』が演奏される。19世紀中葉のパリ音楽界の嗜好とマッチしなかったこともあるが、大器晩成を地でいく作曲家だった。

しかし1839年から1842年に書かれ、1843年春に出版された3曲の協奏的三重奏曲(第1番～第3番)作品1、およびそこから派生した同第4番の作品2を忘れてはいけない。武骨な構造と美しい調べをあわせ持つ第1番は特に。フランク自身によって“サロンの三重奏曲”と名づけられた第2番もいい。ちなみに作品1だが、最初の作品でも最初に出版された曲でもない。これはベートーヴェンの作品1も同様である。

若き作曲家の決意表明でもある協奏的三重奏曲第1番の魅力は尽きない。内に秘めた芸術的なパッションがついに溢れ出る場面も用意された。オルガン音楽を思わせる驚愕の転調やゲネラルパウゼ(全休止)も、構えの大きな曲の個性に貢献している。

第1楽章 アンダンテ・コン・モート

第2楽章 アレグロ・モルト(アタッカで続けて第3楽章へ)

第3楽章 フィナーレ:アレグロ・マエストーソ